

紹介

日本文化史論

松本彦次郎著

特異の學風をもつて知られる著者の明治・大正昭和に亘る勞作長短二十三篇を收められたものである。(但國民精神文化研究所關係のほかを除く) 取扱ふところは古代より近世の諸問題であるが本文四六六頁の中、大正時代の作である鎌倉時代の佛教に關するもの四篇をもつて二〇〇頁を占め、宗教史家としての著者の面目を示すとともに注目すべきは、對象のみならず其等を取扱ふ態度においても宗教的感情を強くにじませ、獨自の持味を具へてゐることである。序文に近角常禪師等の名の擧げられてゐることも看過してはならぬところであらう。此態度は宗教現象のみならずひろく日本文化に對する深い愛として現れ、このゆゑに著者の事物に對する理解は内面的であり、人々に前示するところのものを多く有してゐる。一二の例をあぐれば、聖德太子十七條憲法における佛教的影響のうちある日本的なるものの考察、(十七條憲法の綜合的研究) 古代より中世に於ける歴史と物語との共通性と、その本質論の深まりゆくところ自ら分化せる過程より歴史哲學形成の問題を指示せること、(日本中世初期に於ける文學即歴

史論) 鎌倉時代新宗教運動における口語で書かれた著書消息、出現の意味を明らかにせること(鎌倉時代に於ける宗教改革の諸問題) 等、隨處に示される閃きは著者の歴史に「隨順」する態度が祖師に對する信徒のそれに似る愛の情をもつてなされたによると思はれる。斯かる愛が事物の内面的理解を可能ならしめる要因である。

斯く考へて此態度を史家が執るとき生ずべき限界性に關する反省が来る。個々を全體の中において考へることを歴史理解の本質とする限り、史家は「生命に躍入」して得た知識をその内的論理に従つて構成せねばならぬのであるが、「流轉」する對象への感興に身を委ねるとき此點において缺陷を生ずることを思はねばならない。著者もまた斯かる事を不用意のうちに示してゐると認められるものがある。著者が異常な關心をもつて書き續く事項が屢々變轉し前後の聯絡について何等示されず讀者また辿り得ぬことがあるのである。

(鎌倉時代に於ける宗教改革の諸問題)は最長篇(一一九頁)であつて隨處に興味ある見解を披瀝してゐられるが長期に亘り雜誌に連載されたものとして首尾の構成的統一を缺くは止むを得ずとするも、序と思はれる(一)において取扱ふところは(イ)禪佛教徒が新佛教徒を攻撃するときその教義よりは道德問題を的とすること(ロ)惠心の往生要集が讀む人をして反省し懺悔せしめる力を有したこと(ハ)平安時代淨土往生の思想が藝術と離るべからざる關係にあつたこと(ニ)鎌倉時代の新宗教は一般

國民に宗教的自覺を促すことに大なる目的を置いたことの諸事項であるが、其等各項相互の關係は説明されず斯く書き續ぐ意圖は明らかでない。事象の順序は其等に對する理解により決定されるべき、撰擇した對象をその意味に従ひ、序列するところに史家の重要な一面が考へられるのである。また（宇津保物語の天上國について）は最初八頁を費して當時行なはれた天上・地獄遍歴思想の諸形態を論じ興味あるものであるが、次に九頁に亘る宇津保の天上國遍歴との關係は何等論及されず、ただ讀者の推量するところ、最後に宇津保の没後が日本人として歸郷したことを述べてゐるが他の諸物語との差異を示すことであるかもしれない。左様ならば、此點に重心を置きその立場において諸型に對する綜合的説明を加へることが望まれるのである。他の諸篇にも斯かる希望を抱く反面、著者が「國民精神の個々の状態を論ずるに總體的にしよう」と考へた爲に却つて漠然としたものになり、全體的綜合的方面に幾多の缺陷を生じた」と認めてみられる（鎌倉時代に加はる文藝復興と國民精神）の短篇（十三頁）をまとまりのある、示唆に富む短篇と考へたい。しかし生命に躍入し歴史に隨順することが著者独自の面目である。爲にその研究は鮮新にして叙述は無礙讀書をして大なるよろこびを抱かしめる。再讀して爛々啓發されること多きを思ひ、本書紹介の機を得たことを喜ぶとともに言辭非禮の點は御海容を御願する次第である。尙附録として、著者の「人生と表現」時代の同人三井甲之氏の論文（鎌倉時代の道德・宗教・藝術）が特別の意味でもつて收載されてゐることを記して置

く（本文四六六頁、附録三二頁、定價五圓、河出書館發行）（藤直尊）

神道説苑

江見清 風著

故江見清風翁は明治、大正、昭和の三代にかけて神道界の碩學として今にその學德を欽慕せられてゐる。翁は明治二十七年國學院大學豫科を卒業して史料編輯所に職を奉ぜられたが、後彌彥神社、神宮、八坂神社、明治神宮、春日神社等に奉仕せられ、しかもその間に國史と國文との兩方面にわたつて須叟も學事より離れる事なく、常に新たなる研究の結果を發表して學界に貢獻せられた。

本書は翁のこの學的方面の功勞を記念する爲に、翁が種々の機會に發表せられた論文の中より、神道に關するもの六篇を擇んで收録せるものである。

一體神道史の研究に於て我々が逢着する最も大なる障害は、史料の蒐集の困難と、我々が神社奉仕の實際に就いて理解のない所より來る難澁との二つであらう。而してもしこの兩者を克服し得たとするならば、その研究の結果が如何に學界に裨益するかは論をまたないであらう。即ち翁がその奉仕生活の間によくこの兩方面の困難を克服して、該博なる知識と、周到なる研究によつて内外に推服せらるゝ所以の一つはこゝに存する。

今その一々に就いて見るに、「五部書神道の祖述者及び其の神道